

ZENBI

全国美術館会議機関誌

September 2024 [Vol.26]

Sep. 2024



シリーズ「Shades of Cities」 / London
photo: 棚井文雄 / Fumio Tanai / 著作権者 ID: HJPI320610000334

棚井文雄のロンドン

街は、土地の歴史が織りなす固有の騒りに包まれているようだった。

日本写真著作権協会は、会員11団体の職業写真家を中心に著作権者IDを附番しています。
このIDにより著作権者を特定することができます。



一般社団法人 <https://jpca.gr.jp>
日本写真著作権協会
Japan Photographic Copyright Association
〒102-0082 東京都千代田区一番町25 JCIIビル403

【会員団体】 公益社団法人日本写真家協会
公益社団法人日本広告写真家協会
一般社団法人日本写真文化協会
日本肖像写真家協会
一般社団法人日本写真作家協会
全日本写真連盟
一般社団法人日本スポーツプレス協会
一般社団法人日本自然科学写真協会
日本風景写真協会
公益社団法人日本写真協会
一般社団法人日本スポーツ写真協会

CONTENTS

- 2 会長を終えて 建島 哲
- 3 ごあいさつ 富田章

ブロック報告 2023年10月~2024年4月

- 4 [北海道] 冬の北海道、3つの出来事 瀬戸厚志
- 6 [東北] デジタル・アーカイブ化とその公開・活用について 米山菜未
- 8 [関東] 周年記念展から見えてくる未来 立浪佐和子
- 10 [東京] 生々の力、フォルムとして 北澤智豊
- 12 [北信越] 地域につながる美術館 稲村純子
- 14 [東海] リソースとアップデート 貴家映子
- 16 [近畿] 大阪・関西万博をひかえて 廣田生馬
- 18 [中国] 地元ゆかり—現代の工芸作家の発表の場と藩政時代の作家の顕彰について 山本麻代
- 20 [四国] 四国のたからもの 浅田真珠
- 22 [九州] 来館者や地域とつながる取り組み 祝迫眞澄

新規正会員紹介

- 24 — 小樽芸術村
- 25 — 板橋区立美術館
- 26 — 皇居三の丸尚蔵館
- 27 — 国立アトリサーチセンター
- 28 — 三鷹市美術ギャラリー
- 29 — 桑山美術館

本当の意味でのLED化とは 増澤大助(ライトアンドリット株式会社) 28

賛助会員各社 29

事務局から 30

専門委員会から 31

投稿要領 34

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 35

編集後記 36

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.26 2024年9月1日発行 ©(一社)全国美術館会議

【編集】(一社)全国美術館会議広報委員会 【助成】(公財)石橋財団

【発行者】(一社)全国美術館会議 〒102-0082 東京都千代田区一番町6-3-103 TEL 03-6272-8555

【デザイン】宮谷一孝 【印刷】日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

会長を終えて

去る6月の総会で11年にわたった全国美術館会議の会長をようやく辞すことができた。私なりに愚直に務めを果たしてきたつもりではあるが、あえてようやくと記すのは、当初は歴代会長と同様に6年程度で交代するつもりだったからである。しかし、ちょうどその時期になって辞めるに辞められないシリアスな状況が立て続けに起き、結果的にいえば、むしろそれらの難題に対処することの方が、会長としての主要な仕事になってしまったのだ。昨年でなんとかかかたが付いたので、新会長にバトンタッチできたというわけである。

一つは長年懸案のままにおかれていた全国美術館会議の法人化の問題である。全国美術館会議は設立以来任意団体として運営されていたのだが、定款を定めてはいても、法的な責任の所在があいまいであるという点では同人誌などの集まりと変わることがない。参加館は400館を越え、実質的に日本の美術館界を代表する機関になっているからには、早急に法人格を有する組織へと衣替えしなければならぬ。しかしその登記の手続きは結構複雑で、恒常的な事務所を定める必要もある。司法書士や会計士と打ち合わせながらそうした課題を解決するのに予想以上の時間を費やしてしまったのだ。

悪戦苦闘しながら理事会と総会に諮る段にまできたところで、折り悪く起きてしまったのが新型コロナウイルス禍である。京都市美術館をホスト館にしての開催が予定されていた2021年度の総会はオンラインでの開催になり、理事会もオンラインにせざるをえなくなった。もともとコロナ禍に際しては、どの美術館も長期にわたる休館を余儀なくなくされるなど、未経験の非常事態下であり、全国美術館会議の活動も法人化よりもそちらの方の情報収集を優先させざるをえなかったのだが。

ともあれこうした混乱の日々を乗り越えて法人はスタートした。コロナ禍も収まってはいないとはいえ、リアルな総会、理事会の開催に支障はなくなっている。会長交代の時期としては悪くはないはずだ。新会長の富田章氏には、より積極的な全国美術館会議の発展を期待する次第である。

建島 哲（たてはた あきら・埼玉県立近代美術館館長）

ごあいさつ

このたび全国美術館会議の会長を務めることになりました。

自分がこの任にふさわしいかどうかはさておき、今や400館を超える大所帯となり、一般社団法人として再出発した全国美術館会議が、日本の美術館にとってたいへん重要な組織であり、その使命が重大であること、そしてその会長の責任が非常に重いものであることは論を俟ちません。会長に就任して改めて身の引き締まる思いがいたします。

全国美術館会議の活動の根幹を成すのは委員会や研究部会の活動です。それぞれの分野についての知見を深めたり、実践活動へとつなげていくことももちろん大切ですが、ふだんなかなか交流できない他館の学芸員や職員と知り合い、相互に刺激を与えあう関係を持つことこそ、こうした活動の最も大きな意義と言えます。

全国美術館会議のいちばん大切な存在意義も、こうした活動を行う機会を提供し、それをサポートしていくことにあります。多くの問題を抱える日本の美術館ですが、自館の中だけで解決しようとするのではなく、他館と課題や問題を共有することで見えてくることも少なくないことでしょう。

こうした活動を支え、より活性化していくためには、全国美術館会議自体が安定した基盤を持ち、着実な運営を行っていかなければなりません。そのためにも更なる賛助会員や助成金の確保などをはじめとする、あらゆる方法を検討し、財政の健全化をより推進していく必要があります。

21世紀に入って四半世紀が過ぎ、世界は混迷の度合いを深めているかに見えます。特にここ数年のパンデミックや戦争、為替レートの変動など、美術界にも大きな影響を与える問題は少なくありません。こうした状況の中で、美術館活動は一層困難になってきています。

しかし、そうした中でも、いやそうした状況下にあるからこそ、美術館の存在や活動は大きな意義を有していると言えるでしょう。美術館が多くの人々にとって不可欠なものであるということを常に意識しながら、会長の仕事に誠心誠意向きあっていく所存です。

多くの皆さまの全国美術館会議の活動へのご参加、ご支援をお願いする次第です。

全国美術館会議会長 富田 章（とみた あきら・東京ステーションギャラリー館長）

冬の北海道、3つの出来事

瀬戸厚志(せとあつし・北海道立帯広美術館)



北海道において初となる国立博物館として、2020年北海道白老郡白老町にウポポイ(民族共生象徴空間)の中核施設・国立アイヌ民族博物館がオープン。アイヌ民族の文化について調査研究・情報発信を担う拠点が整備されたことは、非常に大きな出来事となった。オープンこそコロナ禍の影響を受け足踏みした場面も見られたが、学校の団体等による国内旅行や海外からのインバウンドを追い風とし、順調に来館者数を伸ばしている。

前後してさらにアイヌ・ブームを盛り上げたのが、漫画『ゴールデンカムイ』の大ヒットであろう。個性豊かな登場人物と明るいアイヌのキャラクター、息をつかせぬストーリー展開や魅力的な料理などもあり、人気を呼んだ。その冒険譚の中にちりばめられた、アイヌ民族の知恵や思想。文字では難しくなりがちな文化の様相が生き生きと描き出され、世代を超えて広く深く浸透し、大きなブームを生み出した。もちろんその下地には、たゆまなく続けられてきた民族による伝承の歴史があり、加えて博物館を中心とした資料保存と調査研究が支えとなっていることは言うまでもない。

これらの出来事がきっかけとなり、アイヌ民族の文化がメディアでも繰り返し取り上げられるようになると、その生活の重要な一部である芸術への関心も高まっていった。伝統的に続けられてきた彩り鮮やかな刺繍や精緻な木彫、そこに施された独特の模様などが紹介されると、アイヌ・アートは一つのジャンルとして認知されるようになる。今日ではTシャツ

やバンダナなど、模様をデザインした商品が次々と生み出され、多くのショップで目にすることができる。

しかし、アイヌ・アートの懐は深く、裾野は広い。その研究・紹介は緒についたばかりで、現在も発展、進化を続けている。そのことを強く感じさせたのが、北海道立近代美術館で開催された展覧会「AINU ART—モレウのうた」展(1月13日～3月10日)だ。本展では若手作家によるインスタレーションを織り交ぜながら、アイヌ・アートの現在に様々な角度から光を当てた。展覧会名の「モレウ」とはアイヌ民族に伝わる渦巻き紋様のこと。ともすれば手工芸を中心としたクラフトとして見られがちなアイヌ・アートが、そのイメージを過去のものとし、伝統を大切な軸としつつ更なる変化を見せていることを感じさせる展覧会となった。

また、3年おきに開催される札幌国際芸術祭(SIAF)も、この冬注目を集めた話題の一つ。

前回はコロナ禍の初期にあたり、やむなく中止。記録を残すにとどまった。それから4年間を経て、再出発を期しての本年は、初めて冬期間の開催とし(1月20日～2月25日※会場によって前後あり)、札幌市内8会場(北海道立近代美術館、札幌芸術の森美術館、モエレ沼公園ほか)で多彩な展覧会やプロジェクトを展開。特にさっぽろ雪まつりとタイアップした大通2丁目会場では、期間中170万人の観客が訪れたという集客効果を十分に受け、観光客から地元子ども達までがお祭りというハレの舞台の中でアートを楽しむ機会となった。

さて、この芸術祭におけるSNSの反応を紹介しておきたい。今や「映える」映像を撮ることが目的化したSNSにおいて、非日常空間を生み出す現代アートの世界は、親和性が高いということは予想されていたことではある。が、ネットでの反応は、その予想を超えていたと言えるだろう。各会場で撮影され発信されるSNSは、会期が進むにつれて盛り上がり、アートを見ろというよりは親しんでいるという写真の数々が、ネット空間で大きな広がりを見せた。撮影という行為のために芸術祭へ行き、さらに多くの人を巻き込む好循環が、ネット空間を巻き込んだ祝祭的な賑わいを見せた。

多くの美術館で、SNSを広報手段とすべく展覧会場の一角に写真撮影コーナーを設けたり、展示室を撮影OKにしたりするなど、さまざまな工夫を凝らしているが、本事例は示唆に富むものといえるだろう。ともすれば分かりにくいと評される現代アート、その楽しみ方のヒントが、SNSとの関係の中に隠れているのかもしれない。

札幌を舞台とした動向が続いてしまったが、最後に地方美術館の活動を紹介しておきたい。

札幌から特急で約1時間の苫小牧市。この街に根を下ろし、風景画の第一人者として活躍したのが鹿毛正三である。いわゆる日曜画家の1人ではあるが、地域を離れることなく風景画を描き続け、後進の育成にも尽力した。

その回顧展が本年、生誕100年を記念して開催された(「鹿毛正三—アトリエ“薔薇絵亭”より—」展、苫小牧市美術博物館、2月10日～3月24日)。数十年もの時間を経た画布は乾き、すでに油の香りは失せていたものの、筆に込めた画家の熱量が絵の中に残されていた。時代の移ろいと風景の記憶を、ひたむきに写した作品群。それは、この地に住む人々にとってかけがえのない財産となっていることを、展覧会を通して感じられた。

広大な面積を有する北海道においても、札幌への人口集中は進み、地方の過疎化、それに伴う街の縮小は大きな課題だ。しかし、それぞれの街が育んできた美術を継承し、見つめ直し、発信していく。美術館が最も本意とする地域に根ざした活動が、地道に、しかし確かに進められていることに、励まされる思いがした。



北海道立近代美術館「AINU ART—モレウのうた」展 藤戸康平(Singing of the Needle)

デジタル・アーカイブ化とその公開・活用について

米山 茉未 (よねやま まみ・秋田市立千秋美術館)

秋田市立千秋美術館は、1989年の開館から30年以上が経過し、老朽化が進んだ施設・設備の改修工事による約2年間の休館を経て、2024年6月29日にリニューアルオープンを迎えた。

展示室は、壁面展示ケースの更新、小規模展示室の統合、可動壁面パネルのレイアウト変更などにより、幅広い作品に対応したフレキシビリティの高い空間へと変わった。ロビーエリアは、エントランスの移設やショップの新設などにより開かれた雰囲気へと再構築された。拡充された休憩スペースの一角には、タブレット端末で所蔵品の画像閲覧などができる情報コーナーを設けた。

新たに開発した画像閲覧システムでは、当館を代表する所蔵品のうち、展示機会が限られ、展示してもその全体をお見せすることが難しい《佐竹曙山 写生帖》全3冊と伝茨津勝孝筆《秋田街道絵巻》全3巻の高精細画像を公開することとした。

秋田藩8代藩主の佐竹義敦(号・曙山)の命により制作された《佐竹曙山 写生帖》には、虫や鳥、植物の写生図などが多数収められている。画像閲覧システムでは、《写生帖》全3冊計137点の画像を巻ごとにページを送りながら閲覧でき、解説もあわせて表示することで、全貌を把握しやすくなった。

3巻で全長約30メートルにおよぶ《秋田街道絵巻》は、久保田城下(現秋田市)から津軽藩との藩境の岩館(現秋田県山本郡八峰町)まで、街道沿いの風景を描いた絵巻である。《秋田街道絵

巻》の画像は、令和5年度に高精細スキャニングで撮影したもので、一巻ずつ画面が途切れることなく、拡大して細部まで確認できる。

画像閲覧システムで使用した作品画像の撮影は、休館中の事業の一つとして、他の所蔵品とあわせて実施した。2023年4月に施行された改正博物館法に追加された、博物館資料のデジタル・アーカイブ化とその公開へ対応した取り組みでもある。当館では、ホームページ上の「収蔵品データベース」にて、収蔵品約1,600件のうち約600件の情報を公開している。そこで閲覧できる画像は大きくないが、劣化したポジフィルムをスキャンしてデータ化していたものを順次、デジタル画像に差し替えている。

デジタル・アーカイブ化とその公開を進める上で、収蔵品の情報をインターネット上で公開し、幅広いアクセスを可能にすることは、多くの美術館が課題とし、対応を進めている事案の一つだろう。全国美術館会議の東北ブロック会員館33館のうち、ホームページで所蔵品検索が可能なのは2024年4月現在、8館だった。当館を含め独自のシステムを使用している館がほとんどだが、秋田県立近代美術館では県立施設共通の検索システムが構築されていたり、(公財)致道博物館では「文化遺産オンライン」にリンクさせたりといった方法も見られた。休館中の青森県立郷土館では、収蔵資料検索に加えて、考古資料などの一部の作品について360°ビューで画像をぐるぐると回転

させながら閲覧することができた。

ホームページに所蔵品検索機能がない場合でも、おもな所蔵品を画像付きで掲載している館がほとんどだった。宮城県美術館では、主な所蔵品紹介に加えて、岸田劉生や鬚光、パウル・クレーなどの作品の高精細画像30点を閲覧できる。公開されている高精細データは、通常のデジタル撮影に比べて解像度が高く、色彩や凹凸感の再現性に優れたものだ。パソコンや携帯端末で閲覧したが、非常にクリアな色彩で、筆跡や細い線、絵具のひび割れまではっきりと見え、デジタル画像を閲覧する醍醐味を味わえる。

秋田県立近代美術館では、2024年4月からインターネット上の仮想空間で所蔵品を鑑賞できるサービス「メタバース×キャンビ」の運用を開始した。仮想空間に入ると、美術館の建物が見え、そこから館内へ進み、展示室へと向かう。何度も訪れている場所だけに、景色や内装などの再現性の高さに驚いた。展示室には、高精細3DCGにより秋

田蘭画の小田野直武筆《不忍池図》など、約40件が展示されており、近づいたり、離れたったり、角度を変えたりしながら、作品鑑賞を楽しんだ。筆者はパソコンのキーボードを操作して、仮想空間を移動したが、報道発表等にあるようにVRゴーグルやコントローラーを使用すればさらに臨場感を得られたのではと心残りである。

コロナ禍や博物館法改正を経て、収蔵品をデジタル・アーカイブ化し、インターネット等を通じて情報を公開していく重要性はますます高まっている。公開・活用法については、東北だけでも様々な取り組みがあり、それぞれを見ていくと作品の良さが伝わり、来館意欲を掻き立てられるものがたくさんあった。情報公開の方法や使用する技術には、選択肢が数多くある。その中から自館に最適な選択をするためにも、日々進化するデジタル技術やそれに伴う社会変化にも目を向け、こちらの知識もアップデートしていかねばと思いを新たにした。



秋田県立近代美術館「メタバース×キャンビ」
仮想空間に展示された作品



秋田市立千秋美術館 画像閲覧システムの画面
《秋田街道絵巻》土崎湊の場面

周年記念展から見えてくる未来

立浪佐和子 (たちなみ さわこ・横須賀美術館)



関東ブロックでは、開館から数えて大きな区切りとなる年を迎え、周年記念展を開催する美術館が複数あった。全てを取り上げることはできないが、2023年10月から2024年4月の期間に開催された、いくつかの記念展を取り上げたい。

アーツ前橋では、開館10周年記念展として「ニューホライズン 歴史から未来へ」(2023年10月14日～2月12日)が開催された。メイン会場はアーツ前橋だが、それ以外にも2023年5月に誕生した「まえばしギャラリー、アーケード商店街、商業ビルなどが会場として利用された。それらの場所で国内外30組ものアーティストの作品が設置され、多くの人が評するように、芸術祭さながらの多様で充実した展覧会であった。美術館から出て、地域コミュニティや外部組織と連携した事業を行うとき、意義を語る中でこちらの理想のストーリーを押し付けていないか、これまでない取り組みという大義名分のもとに協力者を搾取していないかなど自己を顧みながら、誠実に進めることが肝要だと思うが、アーツ前橋はこれまでの地域アートプロジェクトの経験や配慮の積み重ねがあるからこそ館外の複数箇所での展示が実現できるのだと想像する。準備期間の短さもあったようだが、これまでもこれからも、中心市街地にある美術館として街とともに歩いていくという気概を感じる展覧会であった。群馬県立近代美術館では、今後続くいくつかの周年記念展の嚆矢として「開館50周年記念コレクションのつくりかた／つたえかた—日本と西

洋の近代美術—展(4月20日～6月23日)が始まった。開館当初の洋画コレクションにおいて質量ともに充実していたという湯浅一郎、福沢一郎、山口薫の3作家の作品紹介を皮切りに、開館後の作品収集によってコレクションがどのように広がり厚くなっていったのか、具体的な作家や作品を軸に据えて、わかりやすく示される。続いて、コレクションの伝え方として、展覧会への出品や鑑賞サポートツールが紹介される。会期を同じくして、県立2館目の美術館である群馬県立館林美術館でも、群馬県立近代美術館と歩調を合わせるように「シンフォニー・オブ・アート—イメージと素材の饗宴」展(4月20日～6月23日)が開催された。こちらもコレクションを中心としながら、「集める(集められた)」という切り口で、形やイメージなどの集積からなる作品を紹介する展覧会である。最終章「繊維の集積 ファイバーアート」では、ゲスト・アーティストの作品とともに、群馬県立近代美術館からの出品作が目玉を引く。絹産業の歴史を持つ群馬の県立美術館として、染織作品の紹介や収集を活動方針の一つとしてきたことが語られるのだが、近代美術館と館林美術館を併せて観覧することで、群馬県立近代美術館のコレクションの輪郭がより際立ってくるつくりは、周年を機に、コレクションの過程と独自性を再発信する企画の良例と感じた。

千葉県立美術館では、4月6日から「開館50周年記念 HELLO! コレクション ZOZO×千葉県立美術館」展が開催した(4月6日～5月19

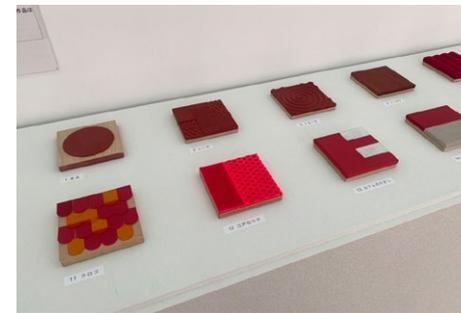
日)。千葉県立美術館では、2021年12月に外部有識者による千葉県立美術館アドバイザリー会議が立ち上げられ、数年をかけて回を重ね、2024年3月に今後の運営指針となる「千葉県立美術館活性化基本構想」が策定された。「ZOZO×千葉県立美術館」展に限らず、数年前から始まった千葉ゆかりの新進作家を紹介する展覧会シリーズなど、同時代の多彩な表現に目を配っていくという機運が高まっていたように思うが、基本構想を受けて、さらに今後どのような活動が生まれてくるのか。筆者が所属する横須賀美術館の話になってしまうが、横須賀美術館は2027年によりやく開館20周年を迎える。歴史の浅い館ではあるのだが、2022年、新型コロナウイルス感染症がまだ人々の行動に大きく影響していた頃に、教育委員会から市長部局(文化スポーツ観光部)に移管するなど、それなりに変化は訪れる。美術館が市長部局

の所管となることは珍しいことではないが、横須賀市が新たな産業の柱として観光に力を入れていくことから、美術館も集客や都市イメージの向上に寄与することをより強く求められるようになった。千葉県立美術館の活性化基本構想は、行政の期待を背負いつつ、冷静に自らの現状と課題を見据える。期待や課題に対して、実現・持続可能な私たちでどう答えていくのか参考としたい。

最後になるが、本稿で触れた展覧会と同時期に、神奈川県立近代美術館をはじめ、足利市立美術館、小山市立車屋美術館、しもだて美術館、川口市立アートギャラリー・アトリア、佐倉市立美術館、平山郁夫シルクロード美術館においても、開館や市制から数えた周年を記念する展覧会が開催された。見られていないものもあり、触れることができなかったことをお許しいただきたい。



群馬県立近代美術館「コレクションのつくりかた／つたえかた」展 鑑賞サポートツール(アートパズル)



群馬県立近代美術館「コレクションのつくりかた／つたえかた」展 鑑賞サポートツール(赤のさわるコレクション)

生々の力、フォルムとして

北澤智豊(きたざわともと・武蔵野美術大学 美術館・図書館)



翻弄のコロナも5類へと移行して1年が経とうとしている。ようやく展覧会準備においても常態を取り戻してきているのではないだろうか。東京地区においても力が入った企画展が数多く見受けられたのだが、その恣意的な抜粋として少々関連付けながら展覧会を振り返ってみたい。

まず海外展では、東京都美術館で2023年4月から開催された「マティス展」の記憶も新しいが、国立新美術館にて質実ともにコロナ禍の回復を象徴するかのように、延期されていた「マティス 自由なフォルム」展(2月14日～5月27日)が開催された。タイトルが示すように絵画法から解放された「切り紙絵」をはじめとした造形が、ロザリオ礼拝堂での体験として軽やかに展開する姿を見せた。その一方でフォルムの現身というべきか《祭壇のキリスト磔刑像》が、彫刻として展示の重心となっていた。次に、開催時期は前後するが、マティスの切り紙絵のように、触覚的な木版表現を特徴とする棟方志功の回顧展「生誕120年 棟方志功展メイキング・オブ・ムナカタ」(東京国立近代美術館、2023年10月6日～12月3日)が開催された。大型作品が所狭しと並び、棟方絵画のダイナミズムを見せた。その空間の支配力は20世紀絵画に対するエスニカルな一つの解であり、また、そこには版木を彫ることで沸き起こる、青森に生まれ育った棟方の内なるリビドーを感じさせた。続いて、この北東北のローカルティを見せてくれたのが「みちのくといとしい私たち」展(東京ステーションギャ

ラリー、2023年12月2日～2月12日)ということになる。陸奥に息づく民間仏の数々は、中央の様式から離れたその健やかな表現により、木を彫ることによる原初的な造形を見せた。また、摩耗した抽象的なフォルムを残すまでとなった「神像」は、人々の信仰によって、その手跡が長い年月をかけて内省的につくり出した抽象彫刻のようでもあった。この東京駅という何処のローカルとも接続する中央性のなかで、博物館的に固有の尊さを見る体験は展覧会としても考えさせられるものがあった。

さて、時節を振り返ると2024年に入りカール・アンドレ(88歳)、リチャード・セラ(85歳)、そして舟越桂(72歳)と現代彫刻の旗手たちの悲報が相次いだ。その一方で、期せずして彼らにも大きな影響を与えた現代彫刻の先駆、コンスタンティン・ブランクーシの展覧会「ブランクーシ 本質を象る」展(アーティゾン美術館、3月30日～7月7日)が開催された。これまで日本でその全容に迫るような展覧会がなかったとのことで、収集の難しさを感じさせたにせよ、現代彫刻の原姿を再見するうえでは待望の企画といえる。付して、同時期にポンピドゥー・センターでも企画展が開催されており、100年あまりが過ぎて、一つの偉大なる20世紀美術のオリジナリティが示されたといえよう。さて、アーティゾン美術館の展示では、上質な空間のなかに精神性ある彫刻のフォルムを洗練させて見せるとともに、ブランクーシが撮影した写真などが数多く紹介されており、高いドキュメント性を含む展

示であった。また、展示された卵型や鳥シリーズなどの鑄造による彫刻のフォルムは、ブランクーシの内的視覚の蒸留というべきか、物の本当の意味に迫る、内なる形象へと転位する姿を見せた。さらに本人のアトリエをオマージュした展示空間が試みられており、聖地再現としては前述のマティス展とも近いが、彫刻のフォルムが浮かび上がる漂白された非現実的な空間においては、個々のフォルムの純度として、いわば彫刻の可能態を示しているかのようであった。その一方で、本人が撮影した何度も繰り返して回り続ける《レダ》の映像には、作品名に寓意されたようにブランクーシの醸造されたフォルムへの視覚的な陶酔が映し出されていた。そして、展示の終わりにブランクーシ撮影の空へと続く《無限柱》の写真が掛けられていたが、それを未来への眼差しとすれば、その影響を強く受けながら彫刻を始めたミニマル・アートの旗手「カール・アンドレ 彫と詩、その間」展(DIC川村記念美術館、3月9日～6月30日)へと接続できよう。自館の名コレクションで20世紀美術を振り返りながら贅沢な視覚準備をした後に、アンドレの展示へと続く。理知的な彫刻の構造体としての認識を

前提としながらも、空間の埒として、その規則性から生起する揺らぎ、現象としての物質の存在性は、言葉の微妙としての詩というべきか、アンドレの解像する彫刻としてのリアリティを感じさせた。

最後に、現在として、この彫刻のフォルムと物質、その間にあるアイデア的なものを引き受けるかのよう「岡崎乾二郎|くにつかみのくにおす」(都内アートスペース、3月10日～5月12日)が開かれた。新作となる彫刻25点か、大小異なる空間ごとに切り口を変えながら展開した。鑄造と塑造、拡大と質量といった彫刻の語法を主体化させ、創造という行為そのものを作品として制御し、そのプロセスにおいて感覚や意識、法則や偶然のなかで発現する形質、それ自体を彫刻として実定させたかのようであった。諸現象のなかから彫刻を可能とするものは、作家の圧倒的な直観とその表出からの陶冶に他ならないのだとも感じさせた。まさにこれら作品こそ、岡崎氏の名著『ルネサンス 経験の条件』の冒頭に論じられた、前述マティス展のロザリオ礼拝堂に描かれた聖顔布への一つの解題と捉えるなれば、彫刻としてその現れを、持久する思惟で繋ぎ止めたといえよう。



「ブランクーシ 本質を象る」展 会場風景 撮影：木奥恵三



「岡崎乾二郎|くにつかみのくにおす」展 会場風景 撮影：中川周、画像提供：オライビバアブ

地域につながる美術館

稲村純子(いなむら すみこ・松本市美術館)



2024年1月1日におきた能登半島地震。夕方16時10分、松本市でも長い揺れを感じたが、当館の被害はなし。しかしその後すぐに被災地の惨状を知るに、心を痛めた。私たちに何ができるのか、自然災害に対してどう向き合い取り組んでいくのか、改めて考える日々である。この地震については、本号の全美フォーラムにおいて富山県美術館の以倉新氏のご寄稿があるとうかがったので、拝読したい。

さて、各館の活動のなかでは、地域ゆかりの作家や作品にとどまらず、地域における美術史の流れを捉えた展覧会がいくつもみられた。まずは、上田市立美術館で開催された「上田クロニクルー上田・小県(ちいさがた)洋画史100年の系譜」展(1月13日～3月10日)である。芸術家・山本鼎によって上田市とその周辺地域に「美術」の種がまかれてから100年が経過したことを機に、地域の美術史をアーカイブして次代への継承を試みたという展覧会。上田市と東御市が共同で企画・調査・開催する地域連携事業として初の美術展とのことで、東御市梅野記念絵画館・ふれあい館との同時開催であった。タイトルにクロニクル(年代記)とあり、大正時代から現代までのこの地域の美術を総覧できる展覧会で、展示室に入ると山本鼎の自画像が1点目に展示され、その始まりを象徴していた。両館の所蔵作品のほか、主に県内から多数の作品が集められており、まとまりを持った展示に感嘆の思いである。上田・小県地域の美術の流れ

や奥深さを教えられ、魅力の尽きないこの地域の美術をさらに観てみたいと思える内容であった。

次に、長野県立美術館で開催された「春陽会誕生100年 それぞれの闘い 岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」展(3月16日～5月12日)である。東京ステーションギャラリー、栃木県立美術館、碧南市藤井達吉現代美術館にも巡回している展覧会で、当館の所蔵作品である石井鶴三の作品も出品されており、2年以上前に開催館の方から作品調査のお電話をいただいた時から個人的にもとても楽しみにしていた。先に記述した「上田クロニクル」とほぼ同じ100年を、春陽会という美術団体をとおして見つめ直す展覧会であり、長野県にゆかりのある作家も多く、長野県立美術館の展示ではそのあたりを強く意識した展示となっていたように思う。企画展の会場だけでなく、コレクション展にも連動して春陽会に属した作家の作品を展示しており、併せて観ることによってより深く地域とのつながりを知ることができた。また、春陽会出品作等が、各作家ゆかりの地に多く所蔵されていることを知るにつけ、各美術館が収集において果たすべき役割というもの、それが地域と密接につながる意義を改めて考える機会となった。

上田での美術活動「鹿苑会」が「春陽会東北信研究会」に発展して現在に至るということで、今回紹介した二つの展覧会がほぼ同時期に開催され、長野県における近代美術の動向が検証されたことの功績は大きいと思う。大変興味深く、学ぶことの

多い展覧会で、非常に刺激を受けた。

また、当館の例ではあるが、松本市美術館では「映画監督 山崎貴の世界」展(2023年7月15日～10月29日)と、「須藤康花 一光と闇の記憶」展(2023年12月9日～3月24日)を開催した。日本を代表する映画監督の一人、山崎貴監督は、松本市の出身である。山崎監督がつくりあげる映像の世界を、絵コンテやデザイン画、映像制作のために作られたミニチュアや出演者の衣装、実物大のセットをはじめ、VFX(ビジュアル・エフェクト)の制作過程や完成映像などを通して紹介した大規模展覧会で、監督のデビュー作から最新作までを網羅した。展覧会は55,000人を超える入場者があり、監督の出身地にある美術館として、意義のある展覧会が開催できたと思う。また、須藤康花は30歳という若さで夭折した画家で、晩年を長野県の麻績村で過ごした。幼い頃から病と闘い、生と死との葛藤の間で描き続けた絵と詩を

とおして、知られざる画家の全貌に迫る初めての大规模回顧展となった。

この他、北信越ブロックでは注目すべき展覧会が多数開催されていたが、今回は長野県内の美術館についての紹介に留まったことをお許しいただきたい。本稿を執筆している現在、茅野市美術館では「生誕110年 矢崎博信 シュルレアリスムがみせる夢」展(4月11日～7月7日)が常設展で、また飯田市美術博物館では「美術博物館館長退館記念 滝沢具幸展」(3月10日～5月26日)が開催されている。いずれも美術館のある地が出身の画家だ。また、伊那市高遠町生まれの池上秀敏が生誕150年ということで、伊那市の3つの施設、信州高遠美術館、練馬区立美術館、長野県立美術館で2月から6月の間にそれぞれ展覧会が開催される。地域につながる美術館として、各館が独自の視点から為すこれらの展覧会。今回、その一端をお伝えできたなら幸いである。



上田市立美術館
「上田クロニクルー上田・小県洋画史100年の系譜」展
会場風景



長野県立美術館
「春陽会誕生100年 それぞれの闘い 岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」展
会場風景

リソースとアップデート

貴家映子(さすがえいこ・静岡県立美術館)

2023年度の下半期、筆者が目にした美術館活動をリソースとアップデートというキーワードで報告してみたい。展覧会の開催コストが上昇を続けるこの数年、美術館の様々なリソースをこれまで以上に活用する必要性がさかんに叫ばれてきた。今期は、そうした状況への応答が実を結んだ企画を随所で目にした。

リソースの第一が、コレクションや文化財であることは言うまでもない。これまでも岐阜・三重と、そして、富山・横浜と共同でコレクション展を開催してきた愛知県美術館は、工事休館中の愛知県陶磁美術館との共催で「コレクションズ・ラリー 愛知県美術館・愛知県陶磁美術館 共同企画」展(1月16日～4月14日)を企画した。4つある各セクションのキュレーションに両館担当者の個性が見える点が新鮮で、それぞれにまったく印象の異なる展示を、境界に置かれた狛犬が導き手となって違和感なくつないでいた。

筆者が所属する静岡県立美術館でも、2館のコラボレーションによる「大大名の名宝—永青文庫×静岡県美の狩野派展」(2023年10月17日～12月10日)を開催した。永青文庫が所蔵する室町・桃山時代の狩野派や中国絵画、肥後狩野派とともに展示されることで、江戸を中心とする当館の狩野派コレクションの価値や位置づけが、いっそう深く理解される機会となった。同じ静岡県内の東西にも目配せすると、上原美術館では、コレクションと収集家とのエピソードに着目した特別展「絵画

は語る—上原コレクションのストーリー」(2023年10月7日～1月8日)が開催された。とすると小品と見なされうる作品も、「なぜここにあるのか」を知ることで、とても身近で大切なものを感じられる。個人コレクションを元とし、親密な展示空間を有する同館ならではの企画だった。浜松市美術館では、地域のアイデンティティの源となる知られざる文化財に光を当てた好評企画の第二弾「みほとけのキセキII—遠州・三河のしられざる祈り—」展(2023年10月14日～12月3日)が開催され、学校、寺院と連携した地域学習に成果を残した。

美術館のリソースはコレクションだけでなくとどまらない。そのことを強く感じさせたのが、岐阜県美術館の「アートまるケット 展覧会を準備します、展。」(1月13日～3月17日)で、2024年秋開催予定の展覧会の準備過程を展示する、という斬新な企画であった。近年、美術館の舞台裏を見せる展示は各所で行われてきたが、低酸素濃度処理(燻蒸)作業そのものが「展示」されていたのには驚いた。展示室の状況は、準備の進展とともに移り変わり、作品の額装や撮影が公開された日もあったという。また、館長である日比野克彦氏がルンドンゆかりの地をめぐる動画が公開され、氏によるアートコミュニケーション作品《Such Such Such》も会場の一角を占めた。常設の鑑賞ワークショップとも言い換えうる同企画は、一般の来場者にとってはやや専門的すぎるかもしれない展示内容に、主体的に関心を持つ仕掛けとなっていたと想像する。修

復や保存の専門家を擁し、著名なアーティストを館長とする同館ならではの、人材も一つの資源として成立した企画であった。

続いて、アップデートの事例を足早に見てみよう。ハード面でのアップデートでは、豊橋市美術博物館のリニューアルオープンがあった(3月1日)。目に見える部分では、入口ホールに溶け込むようにしてエレベーターが設けられたことに加え、図録等の閲覧コーナーには授乳室とキッズコーナーを併設し、筆者が訪れた日も、子どもたちが絵本を読みながら寛ぐ様子が見られた。ソフト面でのアップデートでは、美術館利用者のアクセシビリティ向上を目指し多方面との協働を実現してきたここ数年の三重県立美術館の試みが注目される。今期は、三重在住のアーティストによる個展「藤原康博 記憶の稜線を歩く」(2023年11月3日～2月4日)の開催にあわせて、不登校生徒のための教育支援センターとの連携ワークショップを計画するなど、これまで想定してきた「利用者」の枠組みを更新、拡大していくチャレンジを続けている。

再び静岡県立美術館から、「天地耕作 初源への道行き」展(2月10日～3月27日)は、県西部の旧引佐郡で行われていた知られざる野外芸術活動に光を当てた企画である。作品を見せない、残

さないという、既存の「美術」の概念を覆すような芸術実践を紹介したことは、館にとって、前年度の「みる誕生 鴻池朋子展」につづく挑戦だった。評価や位置づけが確立された作家や作品だけを扱うのではなく、いま起こりつつある課題や表現と向きあい、新たな価値を切り開いていくための、さらなる一歩となったと思いたい。

最後に、豊田市美術館で行われた「未完の始まり：未来のヴンダーカンマー」展(1月20日～5月6日)にも触れたい。2024年春、隣り合った敷地での博物館の開館を視野に企画されたもので、5組のアーティストが、博物館が内包しうる長大かつ多元的な時空を、現代の課題や紛争ともリンクさせつつ、それぞれの方法で垣間見せた展覧会だ。美術を通して社会にコミットする存在として、私たち美術館学芸員が、過去(=リソース)と向きあい、日々変化する現在に対応(=アップデート)しようとするのが、考えてみれば当然である。しかし、その営みを惑星規模で意識する機会はなかなかない。同展は、一人の人間の生、さらには人類史をも超える時間の中で、あるいは、国と国、人と自然といった境界を越えて、博物館が持ちうる力とは何か、ときに立ち止まって考えることの大切さや可能性を示唆していた。



岐阜県美術館「アートまるケット 展覧会を準備します、展。」会場風景
岐阜県美術館提供
*恒温恒湿環境下での窒素置換による大規模な低酸素濃度処理



豊田市美術館「未完の始まり：未来のヴンダーカンマー」展
ガブリエル・リコ展示風景 写真：ToLoLo Studio

大阪・関西万博をひかえて

廣田生馬 (ひろたいくま・神戸市立小磯記念美術館)



近畿ブロックの2023年秋から24年春までの美術界の動きのいくつかについて述べる。京阪神など個性豊かで文化的に自立した都市が集まるエリアであるが、最近には特に現代美術系の展覧会や芸術祭が元気だ。まず今回で14回目となる「六甲ミーツ・アート2023 beyond」(2023年8月26日～11月23日)が、過去最多となる約50組のアーティストの作品展示の場としてROKKO森の音ミュージアムなどで開催された。山路沿いに作品が並ぶゾーンも新設され、日常を離れた自然の中で芸術の魅力をより深く味わえるようになった。出展作品の内、不定形の白いオブジェが特徴的な武田真佳の《Case》と、水が詰められた透明な風船の集合体である加藤美紗の《溢れる》などは2024年春にJR灘駅前の屋外作品として再設置され、街中アートとしての新たな魅力を示している。

また、2023年の暮れからは、70名以上の国内外アーティストの作品が集う「Study:大阪関西国際芸術祭 Vol.3」(2023年12月23日～28日、一部会場は会期延長)が、コングレコンベンションセンターなど10数会場で開催された。2025年4月からの万博と同芸術祭の同時開催の可能性に向けた「Study」の一環である。筆者が特に注目したゾーンは「ここにある一記憶と忘却、または表裏」(日の出湯はなれ かいさん路地 長屋・花園北エリア)で、曲げられたパイプや自作の畳を廃屋内で組み合わせた常木理早の《フラットな関係》など国内外5名の作品が紹介された。大阪での現代美

術家作品の長期展示としては、絹谷幸二 天空美術館の「Energy - God of Nature」展(2023年12月15日～6月30日)がある。会場では爆発と黒煙を背に降三世明王が念仏を唱える《喝破》をはじめ、神仏や神獣などが登場する作品の迫力に圧倒される。同館は梅田スカイビルタワーウエスト27階にあり、前述の200号作品などはエレベーターに乗らず階段で会場階まで運んだという。裏方の努力もひととき大変な展示と言える。

2024年2月には、京都市京セラ美術館で、現代美術家として第一線で活躍する村上隆の大掛かりな個展「村上隆 もののけ 京都」(2月3日～9月1日)が始まり、洛中洛外園といった日本美術の傑作を引用しつつも現代性と遊び心に満ちた作品などが多くの鑑賞者を魅了している。さらに、4月からは、滋賀県立美術館の「つくる冒険 日本のアール・ブリュット45人 一たといえ、も」を何百回と書く。展(4月20日～6月23日)が開催され、福祉施設などに所属して制作を行う45作家の約450点が「色と形をおいかけて」など5つのテーマに沿って紹介された。

一方、これらの現代美術に比して古典的とも言える、近代絵画の巨匠たちの画業を丁寧に辿る企画も相次いだ。その一つ、西宮市大谷記念美術館で開催された「生誕130年 没後60年を越えて 須田国太郎の芸術—三つのまなざし—」展(3月2日～4月21日)では、関西洋画壇と関りの深い須田の代表的な風景画などで画業を辿る展示に加

え、能・狂言に特化したコーナーや著作物や講義ノートといった学術面での追求にスポットを当てたゾーンなどが興味深かった。

また、大阪中之島美術館で開催された「没後50年 福田平八郎」展(3月9日～5月6日)は、《漣》(重文)を所蔵する同館と福田の出身地・大分県立美術館のコラボ感が強く出ており、初期の写真表現から大胆に抽象的な画風に至る流れの展覧と写生帖など関連資料の充実ぶりも注目に値する。同展を機にコレクションへの理解を深めたいという館側の思いも感じられよう。さらに、京都の星野画廊で企画された「黒田重太郎遺作展 近代洋画の重鎮—日本独自の洋画発展に捧げた人生—」(3月23日～5月4日)は、80点余の油彩画で黒田の画業を振り返るとともに、写実に重点を置きつつ独自の洋画表現を目指した点を再評価するものだ。

既存コレクションの展示では、顕彰作家の歴史・群像画の力量を挿絵やその下絵で味わうことができる、堺 アルフォンス・ミュシャ館の「イラストレーション ミュシャとアール・ヌーヴォーの挿絵」展(4月6日～7月28日)、美術・工芸・歴史作品を柿衛文庫の俳諧俳句資料とあわせて紹介した、市立伊丹ミュージアムの「I/M Collection」展

(3月2日～24日)などが、自館コレクションをより良く見てもらいたいという芸員らの思いが伝わる点で印象深い。

最後に、現代美術家が館のコレクションを再解釈した例として芦屋市立美術館の「art resonance vol.01 時代の解凍 Defrosting Time: Art Across Generations」展(2023年10月28日～2月4日)を紹介したい。これは関西を拠点に国内外で活躍する藤本由紀夫、高橋耕平、野原万里絵、黒田大スケに同館コレクションから選定してもらった津高和一、柳原義達ら物故作家作品の再解釈を委ね、呼応する芸術作品を創作してもらおう試みだ。例えばホールでは壁面に津高作品が吊られ床面に高橋が津高に呼応して制作した作品が広がった。この企画をやり遂げた同館の粘り強い努力に頭の下がる思いがする。

今後万博によるインバウンド効果を考えて高い集客性を意識した展覧会が増えると思われる近畿ブロックであるが、各展示会場を巡り、また本稿執筆へのリサーチに協力してくれた当館スタッフらの感想を詳しく聞く中で、対象が現代美術家、物故作家を問わず真摯に作品と向き合う芸員らの熱意が感じられ心強く思えた。



「Study:大阪関西国際芸術祭 Vol.3」花園北エリア 会場風景



芦屋市立美術館 「art resonance vol.01 時代の解凍 Defrosting Time: Art Across Generations」展 会場風景

地元ゆかり

一現代の工芸作家の発表の場と 藩政時代の作家の顕彰について

山本麻代(やまもとまよ・島根県立美術館)

近年民藝に関する展覧会が各地で開かれている。中国ブロックでも「民藝 MINGEI 美は暮らしのなかにある」展が東広島市立美術館に巡回した(2月10日～3月24日)。展覧会に連動して、今に続く産地や作家も関心を集めている。島根県内にも民藝ゆかりの窯が点在しており、連休になるとレンタカーを借りて窯元めぐりをする観光客の姿が見られる。コロナ禍であっても、完全自粛を求められた時期を除けば、一定数の集客があるように見えた。出雲地方にある出西窯においては、工房周辺を「出西くらしのvillage」として運営し、陶器展示販売館だけでなく、ベーカリー・カフェ店、衣料・日用品店を併設し人気を集めている。カフェで使用されるコーヒーカップなどの器はもちろん、出西窯のものだ。一つの窯元が観光スポットとなっている。

一方で2024年1月、島根県唯一のデパート、一畑百貨店が地域住民に惜しまれつつも閉店した。地元の工芸作家にとって、同店の美術画廊で展示を行うことは重要な意味を持つとともに、貴重な発表の場の一つであったために作家から落胆の声が聞かれた。

また、松江市にある田部美術館が開催してきた公募展「茶の湯の造形展」は2023年の春に40回展という記念の年を迎えている。これまで作陶家の挑戦の場となってきたが、40回を一つの区切りとして新たな公募展に生まれ変わることを予定しており、関心と期待を集めているところだ。中国ブロッ

クの中でも島根県、それも工芸分野に限って考えても、作家および窯元の在り方や発表の場が変わってきていることを強く感じている。

さて、2023年下半期の中国ブロック、特に山陰地方では藩政時代に活躍した地域ゆかりの作家を顕彰する展覧会が充実していたように思う。

松江城近くに位置する松江歴史館では「漆壺斎と勝軍木庵―花開く松江の漆文化―」展(2023年10月20日～12月10日)が開催された。松江藩主に取り立てられた漆職人を紹介するもので、小島漆壺斎は初代から当代の7代まで、勝軍木庵は初代から二代までの代々の作品が展示された。作品を通して、江戸時代から現在に至るまで漆芸技術の継承がなされていることや、藩主の好み物が代々作り続けられてきたことが示された。資料展示も充実しており、下絵に加え、手板と呼ばれる蒔絵や塗りの試作をするための小板が展示されていたほか、塗りや蒔絵の漆技術の工程見本も展示され、緻密で時間のかかる漆芸の作業がどのようなものであるか、丁寧に紹介されていた。

田部美術館では「四季の茶道具『雪舞う日』」展(1月2日～3月3日)が開かれ、新春に合わせた茶道具が展示された。大名茶人として知られる松江藩主松平不昧が所持した田邊の銘が付く茶入《瀬戸禾目 銘 田邊》のほか、松平不昧好みの茶道具を多く制作したことで知られる原羊遊斎の《一閑張 桃蒔絵細棗》など、出雲地方ゆかりの品が並んだ。また、他展示室では出雲地方の窯、楽山焼と布志

名焼で江戸時代から大正時代までに制作された焼物の幅広い展開が紹介された。

続いて「生誕200年 根本幽峨 近世鳥取画壇の『黄金時代』最後の華」展(鳥取県立博物館、2月10日～3月20日)は、これまでに鳥取県立博物館で開催された、「鳥取藩御用絵師 沖一峨」展(2006年)、「因幡画壇の奇才 楊谷・元旦」展(2010年)、「鳥取画壇の祖 土方稲嶺」展(2018年)などの鳥取藩で活躍した画家を紹介する展覧会の流れを汲むもので、幽峨の生誕200年を記念して開催する初の大規模な回顧展であった。初期から晩年までの作品が展示され、画題によって幅広く画風を使い分けた幽峨の多様な作画が紹介された。同時に数多く抱えたという門弟の作も展示されていた。総長30m強の《因伯海岸絵図》と、縦約7m、横約4mの《武者絵大幟(村上義日錦旗奉還図)》が展示された迫力ある展示空間は印象に残るものであった。

最後に地域ゆかりの作家ではないが、蒐集者が地域にゆかりがあることから、こちらの展示も紹介

したい。島根県立石見美術館で開催した「石見特別版 永田コレクションの全貌公開〈一章〉北斎―『春朗期』・『宗理期』編」(2023年12月23日～2月12日)である。これは2017年に島根県津和野町出身の永田生慈氏より島根県へ寄贈された2千件を超える北斎に関するコレクションの中から、若き日の北斎の作に焦点を当てた展覧会で、島根県立美術館で2023年の2月から3月に開催した同名の展覧会を石見特別版として再構成したものである。石見美術館でのみ展示された作品も多く、新出の肉筆春画《逢身八契画帖》については初公開となった。同県内で同名の展覧会を2度行うことに驚かれる方がいるかもしれないが、石見美術館は当館から車で約3時間の距離にあること、永田コレクションが永田氏のご遺志により島根県外不出であることを申し添えておきたい。膨大な量のコレクションを紹介するには到底1度の展覧会では足りず、今後複数回の展覧会をもってその全貌を両館で紹介する予定となっている。



鳥取県立博物館「生誕200年根本幽峨 近世鳥取画壇の『黄金時代』最後の華」展 会場風景

四国のたからもの

浅田真珠(あさだ まさみ・徳島県立近代美術館)



筆者は、生まれも育ちも愛知県である。徳島県に引っ越してきてから、1年と少しが経過したところだ。気候風土の異なる四国で過ごす毎日は、新しい出会いで満ち溢れている。特に、四国の様々なミュージアムを訪れた際、その素晴らしいコレクションにいつも感動する。そこで本報告では、筆者が実見した展覧会を振り返りながら、四国各県の美術館が持つコレクションの豊かさをお伝えし、コレクションを集め、守り、活かすために美術館が取り組んでいる仕事に注目する。

まずは香川県。高松市美術館で開催された「2023年度 コレクション展4 ワタシを見つめて」(2023年11月15日～1月20日)では、アーティスト自身の姿をモチーフにした作品が紹介されていた。自己の内面だけでなく他者との関係性や周りの環境など、あらゆる観点から自分を見つめており、そのアプローチの多様さが非常に興味深かった。展示室に入ってすぐの空間からは、何やら神秘的な空気を感じた。壁一面が淡い青色の巨大な紙で覆われ、縦2メートルほどの長さのボートの底のような形のキャンパスが三つ展示されていた。キャンパスには人間のヌードらしきイメージがぼんやりと表現されており、まるでその身体が宙に浮遊しているかのように、それぞれのキャンパスが異なる高さで設置されていた。これらは石原友明の《約束II》という作品で、絵画でもあり彫刻でもありインスタレーションでもあると言えるだろう。新たに寄贈されたキャンパス1点を加えて、本作が発

表された当時の展示が再現されていた。作品単体のみならず展示空間としてより効果的に作品が紹介されており、収集と展示という二つの事業が密接に繋がった美術館活動の意義の大きさを改めて実感した。

次に高知県。高知県立美術館には、高知県ゆかりの世界的写真家・石元泰博のコレクションの保管・研究・普及を目的に開設された石元泰博フォトセンターがある。その開設10周年を記念してこれまでのコレクション展を振り返る「フォトセンターの10年」(2023年11月3日～3月31日)が行われた。筆者が訪れた時には3期(2月14日～3月31日)の展示が行われており、2018～2022年度の展示に出品された作品を見ることができた。《桂離宮》のシリーズのように、バウハウスの造形感覚に基づくシンプルな構成美を捉えた作品もあれば、雲や水、雪のあしあと、人の流れなど、流動的で形のないものを写した作品もあった。多様なテーマから調査や展示に取り組む続けることで作家の本質に迫る姿勢は、郷土ゆかりの作家や芸術を支援し守っていく立場である美術館として最も重要だと感じた。

そして愛媛県。町立久万美術館では、昨年末に行われた「自主企画展 顕神の夢—幻視の表現者—村山槐多、関根正二から現代まで」(2023年10月21日～12月24日)のテーマに基づき所蔵作品を紹介する「2023年度コレクション展2 開館35周年記念 久万美コレクションにみる顕神の

夢」(1月7日～5月12日)を開催した。人間を超越した「何か」を感じ表現したものや「何か」に突き動かされ制作したものなど、鑑賞者の心を強く惹きつける作品ばかりであった。企画展を一過性のものにするのではなく、新たな視点からコレクションを見つめなおし、その価値を深める機会として活かす取り組みは非常に参考になった。

最後に徳島県。徳島県立近代美術館では、4月から二つの展覧会を開催した。「所蔵作品展 2024年度I 新収蔵作品を中心に」(4月13日～7月21日)と「特別展 ユーモア—おかしみの表現に潜むもの—」(4月27日～6月30日)である。所蔵作品展では、昨年度新たに収集した作品を、すでに所蔵している作品との関連を示しながら紹介した。特に、黒川弘毅の《Eros》シリーズは、既収蔵

の1体に加えて新たに2体を収蔵し、これらの作品が初公開された時の展示を再現した。3体がそろったことで、作品の真の姿をお見せすることができるようになったと言えるだろう。特別展については、本稿執筆現在は展示作業中だが、他館の借用作品と合わせて、当館のユーモアあふれるコレクションを幅広い層のお客様に楽しんでいただける展覧会となっていることを願っている。

このように、四国の美術館は、国内外に誇れる充実したコレクションを持っており、あらゆる創意工夫を凝らした展覧会を通じてそれらを紹介している。筆者も四国で働く学芸員の一人として、「四国のたからもの」の魅力を広く発信し、大切に守り、次世代へ受け継いでいくことにこれからも全力で取り組んでいきたい。



高松市美術館「2023年度 コレクション展4 ワタシを見つめて」会場風景



徳島県立近代美術館 所蔵作品展 2024年度I「新収蔵作品を中心に」会場風景

来館者や地域とつながる取り組み

祝迫眞澄（いわいごこますみ・都城市立美術館）

年始に起きた能登半島地震は、全国に大きな悲しみをもたらした。犠牲になられた方々に哀悼の意を表し、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。自館でも対策を再び確認すると共に、日々の活動の有難さを思った。

さて2023年10月から4月の九州地区ではまず、「オチ・オサム展」（福岡市美術館、1月24日～3月24日）が印象深かった。福岡市美術館はこれまで前衛美術グループ「九州派」の研究や企画展を行っており、今回は2022年の田部光子展に続き、佐賀出身の作家オチ・オサム（1936-2015）に焦点を当てている。前半章では、洗濯ばさみやアスファルトなどの素材を用いた九州派時代の立体作品があり、当時の実験性を強烈に感じさせた。後半では渡米後、丸い球体によるイメージを描いたオチの平面作品の展開を知ることが出来た。黒い壁に小品を2～3段に散りばめて掛けたコーナーでは、作家の宇宙を空間的にも体感した。会期に合わせて、福岡市内では2ヶ所のギャラリーでオチの特集があったり、作家の夫人らによる本が同時期に刊行されたり、来館者の興味を縦横につなげる取り組みもあった。会場では若者や外国人、観光客も多く見かけ、その世界観に驚いたように対面し、じっくりと見入っていた。

次に筆者が属す宮崎県では、「河野扶展 向うからやってくるもの一作意を捨てて」（高鍋町美術館、2月3日～3月3日）は、東御市梅野記念絵画館（長野県）と作家遺族の協力で開かれていた。河野

扶（1913-2003）は高鍋町の出身で、厚く色彩を塗り重ねた画面を追求した。会場は、絵具の存在感に満ちた大小の作品の並びの中に、変化や葛藤が自ずと浮かび上がっていた。地元ではほぼ初めて画業を通覧したもので、県内の美術ファンも新鮮な気持ちでその全貌を眺めただろう。延岡市では「延岡の豪商谷家—その暮らしと文化」（延岡城・内藤記念館、2月3日～3月10日）と題し、九州国立博物館に寄託された作品の里帰り展示が行われた。小判や漆工品、屏風、肖像画など、近世から近代の流通と文化が伺い知れ、会場は歴史の華やかな一面に関心を寄せる市民で溢れていた。

続いて、レジデンス（滞在制作）事業の成果報告展も時期的に多く、実際に拝見できたものに限って振り返る。「石垣克子 海・島・山 ちつづきの暮らし（アーティスト・イン・レジデンスつなぎ2023成果展）」（つなぎ美術館、2023年12月2日～2月12日）が開催された。同館ではアーティストのレジデンスを地域と共に企画し受け入れている。本展では、沖縄出身の画家・石垣克子が描いた津奈木町の暖かな自然とともに、軍事基地のある沖縄を描いた作品も展示され、二つの土地を思う作家のリアルな視点を感じさせた。コレクション展と同時に開催された「guest room 008 Navin Rawanchikul ナウイン・ラワンチャイクン Place of Rebirth 新生の地」（北九州市立美術館、2023年8月26日～12月17日）は、タイと福岡で活動する同作家による巨過市場を取材したインスタレーション。変化

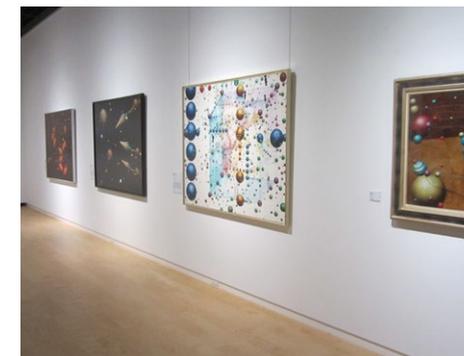
と共にある市場の人々への眼差しに、タイで布を扱う商店に生まれた作家自身の歴史が重なり合った。「旧上庄小レジデンスプログラム2023成果展『来し方、行く末』」（九州芸文館、1月27日～2月12日）は、福岡在住の2人の成果展。香港出身のソニア・チョンによる映像インスタレーションは、夜の住宅から漏れる灯りを象徴として用いたもの。筑後地区の人へのインタビュー、作者の郷里・香港の映像が組み合わせ、鑑賞者はそれぞれ「家」に思いを巡らせる。もう一人の友清ちさとによる、地元生産のミカンからオイルを作る活動や人との交流を映した映像とインスタレーションは、地域と作家との関わり合いを見る人に追体験させた。NPO法人 BEPPU PROJECT による「清島アパート2023活動成果展」（TRANSIT、前後期1月19日～3月11日）は、昨年から市が同法人に

運営を委託してオープンした別府市創造交流発信拠点「TRANSIT」で開かれた。2009年以降続くアーティストの共同生活の場、清島アパートの入居者7名による活動報告である。パフォーマンス、インスタレーション、グラフィックなど、与えられた機会を使って自身を深く掘り下げた個性の強い作風が並ぶ。訪れた際に、地元の方からそこが元々電話交換局だった話を聞いたことも相まって、市民の記憶の中に様々な美術作品を介入、関係させていく同法人の活動の力強さを感じられた。

今回様々な展覧会、レジデンスを通して、多様な何かが重なり合って生み出す面白さを感じる一方、その分かなさや突飛さを地域や鑑賞者の中はどうやってなじませていくかという運営側の工夫、作家の力量を知ることが出来た。



福岡市美術館「オチ・オサム展」会場風景



歴史と芸術が響きあう、「小樽芸術村」。

小樽芸術村

〒047-0031 北海道小樽市色内1丁目3-1



TEL: 0134-31-1033
FAX: 0134-31-1035
E-mail: nitoribzd@nitori.jp

【開館時間】
5～10月:午前9時30分から午後5時まで
11～4月:午前10時から午後5時まで

【休館日】
5～10月:第4水曜日
11～4月:毎週水曜日、年末年始

【開館時期】
2016年7月23日

札幌から電車で約1時間の港町・小樽は、明治期に北海道の海の玄関口としての役割を担い、大正・昭和初期にかけて金融機関や船会社、商社などが進出し、経済の中心地として北海道発展の基礎をつくった。現在では、運河やガス灯、銀行建築や倉庫建築、旧手宮線などの往時の賑わいを残す街並みが、国内外からの観光客を惹きつけている。小樽観光の中心に位置する小樽芸術村は、20世紀初頭に建造された歴史的建造物5棟を活用し、国内外の優れた美術品・工芸品を展示している4つの施設の総称。町の一角が「芸術村」として独立していると思われることが多いが、各施設は色内銀行街から浅草橋周辺に点在している。

ステンドグラス美術館は、旧高橋倉庫(1923年建造)と旧荒田商会(1935年建造)の二つの建物を活用し2016年開館。主に19世紀後半から20世紀初頭にイギリスで制作されたステンドグラスを展示している。似鳥美術館の建物は北海道拓殖銀行小樽支店として1923年に建設された。2017年に美術館として開館し、L.C. ティファニーのステンドグラスのほか、上村松園《桜可里図》などの

日本画、岸田劉生の《静物(リーチの茶碗と果物)》や藤田嗣治の《カフェにて》などの油彩画、彫刻、工芸など、幅広いジャンルの作品を取り揃えている。旧三井銀行小樽支店は、1927年の竣工。建設時の資料や図面、特注で製作された家具などが残されており、欧米における当時の流行を反映した意匠的価値と、小樽の銀行街を形成する銀行建築のうち特に優れた建築としてその価値が認められ、2022年に国の重要文化財指定を受けた。2022年に開館した西洋美術館は小樽運河沿いに位置する旧浪華倉庫を活用した大空間で、フランスやイギリスのステンドグラスのほか、ガレやドームなどのガラス工芸品、アール・ヌーヴォー様式の家具類などを収蔵。

複数の施設で展示している多種多様な収蔵品を繋ぐのは、小樽の街が急速な発達を遂げた19世紀から20世紀という時代性である。日本では明治・大正・昭和初期にあたり、ヨーロッパではアール・ヌーヴォー様式、アール・デコ様式が流行した頃。当館の建築やコレクションを通じて時空の旅をお楽しみいただきたい。(宮永郁恵・みやながいくえ)

ゆるやかな瓦屋根のもとで美術の面白さを発見

板橋区立美術館

〒175-0092 東京都板橋区赤塚 5-34-27



TEL: 03-3979-3251
FAX: 03-3979-3252
E-mail: info@itabashiartmuseum.jp

【開館時間】
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

【休館日】
月曜日(ただし月曜が祝日のときは翌日) 年末年始

【開館時期】
1979年5月20日

板橋区立美術館は1979年に開館した東京23区初の区立美術館で、今年開館45年を迎えた。開館当初は収蔵品がゼロであったが、歴代の学芸員の審美眼により独自のコレクションを形成し、時代を先駆けた展覧会や普及活動を行ってきた。

2019年には、新たな時代のニーズに応えるため大規模改修を行った。自然に溶け込む緩やかな斜面の瓦造による屋根はそのまま残し、ガラスと鋼板を併用したデザインを採用し、軽やかさと重厚感の共存がみられる外観となった。建物のリニューアルと同時に、国内外で活躍されていた駒形克己氏に、この特徴あるフォルムを採り入れた新たなロゴをデザインして頂いた。館内では明るいエントランスが来館者を出迎え、区内に在住した洋画家の古沢岩美氏が愛用したテーブルやイーゼルがラウンジ空間に馴染む。館内外の随所で、積み重ねてきた歴史と新しさの調和が感じられる。展示室は、温湿度を一定に保つため展示環境を整え、可動壁や各ケースの新調、全照明のLED移行、展示壁面の拡張を行った。作品保護と美しい展示、来館者の多様な要望を満たすため、学芸員のアイデアを改修に反映させたこの建物は、優れた建築物を表彰する第30回BELCA賞ベストリフォーム部門にも選ばれた。

建物の装いは新たになったが、活動の根幹を成す理念は変わっていない。当館のコレクションと展示事業は、江戸狩野派に代表される近世絵画、池袋モンパルナスをはじめとする大正から昭和初期の洋画家を中心とする前衛絵画、イタリア・ボローニャ国際絵本原画展やレオ・レオーニなどの絵本という3つの柱から成る。展覧会の多くは学芸員の個性が光る自主企画だ。近年では、長年培ってきた絵本に関する様々な活動が、「絵本のまち板橋」という行政との協同事業にも発展している。また、開館以来力を入れているのが普及活動で、美術の面白さを伝える工夫に満ちたワークショップや、知ることの楽しみに刺激を与える講演等を開催し続けている。

このような当館だが、都内でありながらこの駅から不便である。隠れ家系美術館、永遠の穴場、東京の隅っこなどと自覚(自虐)するほどだが、他にない試みや絶え間ない工夫が実を結び、熱心な来館者に恵まれ、今日も着実にファンを増やしている。この立地でその期待に応え続けることは、美術館活動を支える根っこであり、当館の歩みそのものでもある。(植松有希・うえまつゆうき)

皇居三の丸尚蔵館

〒100-0001 東京都千代田区千代田1-8



TEL: 03-6268-0306
FAX: 03-6268-0375

【開館時間】
午前9時30分から午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

【休館日】
月曜日(祝日の場合は開館し、翌日休館)、
展示替期間、年末年始

【開館時期】
2023年11月3日

三の丸尚蔵館は、平成元年に上皇陛下と香淳皇后により皇室に受け継がれた美術品が国に寄贈されたことを機に、その保存と研究、公開を目的として平成5年に皇居東御苑内に開館し、約30年にわたって展示公開・調査研究活動を実施してきた。現在、調査研究と保存管理の一層の充実、収蔵品の情報発信と公開の推進を図るという観点から、宮内庁により収蔵庫と展示室を拡大する建築工事が進められている。令和5年10月には、その管理・運営が独立行政法人国立文化財機構に移管され、名称を「皇居三の丸尚蔵館」と改め、同機構が設置する5番目の国立博物館として、令和5年11月3日に建設中の建物のうち一部を開館した。なお、全面開館は、令和8年度を予定しており、全面開館時には、講演会などが実施可能なメディアルームやミュージアムショップが整備される予定である。

収蔵品は、平安時代の書の逸品《粘葉本和漢朗詠集》、《金沢本万葉集》、鎌倉時代の絵巻《春日権現験記絵》、《蒙古襲来絵詞》のほか、狩野永徳《唐獅子図屏風》、狩野探幽《源氏物語図屏風》、伊藤若冲《動植綵絵》、近代では下村観山や横山大観、並河靖之、高村光雲らの作品など、書、絵画、

工芸品をはじめ、さまざまな分野にわたり、時代も古代から近現代まで幅広く、各時代を代表する名品が多く含まれている。収蔵品の由来は、近世まで京都御所に伝えられた作品や近代以降にご下命による制作や買い上げ、献上など、様々な経緯で皇室にもたらされたもの、皇室と諸外国の交流による品々など多種多様である。

一部開館中は展示室1、2にて収蔵品を順次公開しており、また、全国の博物館においても皇室と各地域の文化的な結びつきを紹介する地方展を開催している。

皇居東御苑のなかにあるという立地から、皇室と文化の関わりを発信する拠点として、これまで皇室が果たしてきた文化振興や文化財保護の意義を理解したうえで、広報活動や来館者サービスの充実に注力している。また、ギャラリートークや貸切鑑賞会、ワークシートの作成といった教育活動も限られたスペースのなかで積極的に実施しており、特に海外からの観光客に向けた広報の充実のほか、多言語による分かりやすい展示解説や満足度向上のための事業を推進し、文化観光に資するための活動に努めている。

(松岡広樹・まつおかひろき)

国立アトリサーチセンター

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-13-12 北の丸スクエア2階



TEL: 03-6910-0244
FAX: 03-6910-0756

当センターは一般公開施設ではありません。
ご訪問の際は事前にご一報ください。

【設立時期】
2023年3月28日

国立アトリサーチセンター(略称:NCAR、読み方:エヌカー)は、アート振興の新拠点として独立行政法人国立美術館が設けた組織である。キーワードは“アートをつなげる、深める、拓げる”。美術館だけでなく広く国内外の企業や組織団体、専門家とも連携し、研究や多様なプロジェクトを推進する。

具体的には、(1)国立美術館コレクションの活用促進▽全国各地の美術館と国立美術館のコレクションとを組み合わせた展示を実現する「コレクション・ダイアログ」および「コレクション・プラス」事業▽近現代作品の保存修復技術の専門家ワークショップと一般向けレクチャー開催。(2)情報資源の集約と発信▽日本の美術館の収蔵作品の総合データベースSHŪZŌの拡充▽日本の作家に関する総合事典「日本アーティスト事典」を日・英バイリンガルで公開。(3)国際発信・連携促進▽国際的

な芸術祭などへの日本のアーティスト参加支援▽キュレーターらがアジアや欧米などの美術館やアートコミュニティを訪問交流するスタディ・ツアー企画(4)ラーニングの充実▽鑑賞プログラムや教材の研究開発および教員のための鑑賞教育研修▽美術館のアクセシビリティ向上のための調査研究と発信▽医療・福祉・科学技術分野との連携事業「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」などに取り組んでいる。

活動内容や最新の知見をNCARウェブサイトの記事や動画で国内外に発信するとともに、一般参加のシンポジウム開催などを通じて専門家のみならず多くの人に公開している。

すべての人が多様なもの見方に出会い、考え、心を豊かにはぐくむ社会に向けて持続的なアート振興の拠点となることを目指している。

(原田真由美・はらだまゆみ)

三鷹市美術ギャラリー

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 3-35-1 5階



TEL: 0422-79-0033
 FAX: 0422-79-0030
 E-mail: gallery@mitaka-sportsandculture.or.jp

【開館時間】
 午前10時から午後8時まで(入館は午後7時30分まで ※企画展開催期間以外は変更の場合あり)

【休館日】
 月曜日(休日の場合は開館し、翌日、翌々日休館)、
 展示替期間、年末年始

【開館時期】
 1993年10月14日

1993年10月に開館した三鷹市美術ギャラリーは、三鷹市が設置し(公財)三鷹市スポーツと文化財団が管理運営する施設である。三鷹駅南口駅前の商業ビル5階という交通至便な立地と午後8時までの開館という特徴を生かし、開館以来30年様々なジャンルの企画展を開催している。

開館記念展では三鷹市内にアトリエを構えた横山操を取り上げ、その25年後には操のアトリエに残された愛用品や未完の作品を含めその人間性を見せる展覧会を開催した。他にも三鷹にアトリエのあった高松次郎、ニューヨークで暮らす依田洋一朗とその両親、アイルランドの抽象画家リチャード・ゴーマンなど多くの作家を幾度か取り上げて紹介している。開館から30年という月日の中で、継続して作家の活動や動向を注視し、その時々々の社会情勢にあった様々な視点や斬新な展示方法などで味付けを変え、そうして一度目の展覧会その後の活動紹介に留まることなく別の一面を紹介するような新しい切り口での展示が実現している。

展示面積約300㎡という小さな美術館だが、その特性を生かした密度の濃い展示も特徴の一つと

なっている。2021年の北海道立近代美術館ほか4館との巡回展「デビュー50周年記念 諸星大二郎展 異界への扉」では関連資料を含む240点超の作品数で多くの諸星ファンをレポート来館へ誘い、2023年高知県立美術館との巡回展「合田佐和子展 帰る途もつもりもない」ではその濃密な展示空間で1970年代前後の息苦しいほどの空気感を演出した。

展示室の利用は年間の半分を企画展、半分を一般利用者への1週間単位の貸し出しスペースとしている。常設展示室がないため、所蔵品をまとめて展示する機会は多くないが、5年前から取蔵作品展を毎年開催し、2024年最終回の5回目の開催により計700点余を展示した。三鷹市の所蔵品は、三鷹に長く暮らした高松次郎、横山操、桜井浜江、吉田穂高や彼らと同時代の作家などを中心に構成されている。

多様なテーマの企画展開催により美術への入口を増やすとともに、小学校の鑑賞授業受け入れや出張授業、小学生向けワークショップ、講演会など教育機関、地域との連携などにも取り組んでいる。(大竹ゆき・おおたけゆき)

駅前の小さな濃密美術空間

桑山美術館

〒466-0828 愛知県名古屋市中区山手町2-12



TEL: 052-763-5188
 FAX: 052-763-5278
 E-mail: kuwayama-museum@helen.ocn.ne.jp

【開館時間】
 午前10時から午後4時まで

【休館日】
 毎週月曜日(祝日の場合は開館)、祝日の翌日、年末年始、
 展示入替期間

【開館時期】
 1981年4月15日

桑山美術館は愛知県知多市出身で繊維・不動産などの事業を起こした桑山清一が、永年にわたり収集した日本画や茶道具を多くの方々に鑑賞していただきたいとの思いから、財団法人を設立し1981年に開館した。

名古屋市東部の閑静な住宅街に位置し、門から玄関までの石畳に桜や紅葉の木々が覆い季節により異なる表情で迎えてくれる。丸みを帯びた緑の屋根とページュのタイル壁の建物外観はヨーロッパの古城のイメージで、屋上からは名古屋駅周辺の高層ビル群などとともに、快晴の日には濃尾平野を囲む遠くの山並みもくっきりと姿を現す。冬期には雪化粧した山々と名古屋市の景色を同時に望むことができる。

庭園に面したコリドールにはベンチがあり陽気のいい日には鳥のさえずりを聞きながら庭の景色を眺めてゆったりした時を過ごすことができる。

また回遊式日本庭園には春は桜をはじめ牡丹、藤、つつじなどの花で彩られ、秋から冬には金木犀や紅葉、山茶花、梅などが花をつけるほか、形や大きさが異なる灯笼が点在し、「庭園散策ガイド」を手にしながら季節ごとの散策を楽しむことができる。

展覧会は所蔵品の中からテーマ設定した企画展を年間3回開催。4月～7月初旬は日本画を中心とした絵画展、9月～12月初旬は茶道具展、そし

て1月～2月初旬は新春展として独自のテーマで展示を行う。日本画がお好きな方には春の展覧会、茶道具に興味のある方は秋にといった具合に時期に応じて来館でき、年間を通じて異なるジャンルの展示がご覧いただけるので幅広く日本の芸術文化に親しむことができる。

所蔵する絵画は横山大観、竹内栖鳳、上村松園、伊東深水など近代日本画を代表する画家の作品が中心で、さらに梅原龍三郎などの油彩画もある。茶道具は鎌倉時代から現代に亘り、千利休作の竹花入や茶杓、桃山時代に作られた黄瀬戸や志野茶碗などがあり、また工芸品も豊富で毎年入れ替わる企画展はいろいろな切り口の構成を楽しむことができるように工夫している。併せて学芸員によるギャラリートークを開催し企画テーマに沿った作品の背景や作者などの情報について話し、より美術鑑賞を深められる。

春と秋の展覧会ごとに関連する一日体験講座や講演会、館主催の茶会なども開催している。

庭園内に茶席「青山」があり、本館2階には茶室「望浪閣」、別館2階には立礼席が設けられ、見学だけでなく所蔵の茶道具とともに貸出しもしている。別館1階の多目的ホールは定期講習会やグループでの展示会など交流の場としても利用できる。(伊藤大介・いとうだいすけ)

閑静な住宅街で日本の芸術文化に親しむ

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

本当の意味でのLED化とは？

増澤 大助 (ますざわ だいすけ・ライトアンドリヒト株式会社)

当社 ライトアンドリヒト株式会社は、ドイツの照明器具メーカー・ERCO (エルコ) 社の製品販売や展示照明のお手伝いをしております。全国美術館会議には賛助会員として2007年から参加させていただいております。昨今の照明のLED化について少しお話ししたいと思います。

日本国内では2011年の東日本震災後に照明LED化の機運が高まり、様々な形で急激に進みました。比して欧州では2000年過ぎにはすでにその動きが始まっており、美術館や博物館での採用も早い段階から見受けられました。そのころはまだ日本国内のLED化は遅れており、急ピッチで各メーカーが製品化を進めていたように記憶しています。

従来のハロゲン球のような熱源から放射される光には赤外線(や紫外線)が多く含まれ、作品の劣化を進めてしまう要因のひとつでした。一方LEDは、電気が流れるさいにLEDチップ内で発生する電子等の結合現象から生まれるエネルギーの一部が光に変換され発光する、という原理を利用しており、さらには反射板ではなく光学レンズ等で制御されることもあり、ハロゲン球と比較すると赤外線(や紫外線)等の波長を減少(またはほぼ無い状態に)させることが可能となりました。

このことから一部では「LEDは発熱しない」という誤解が生まれてしまいました。確かにLEDの光には熱線が非常に少なく、照射されている作品の劣化対策にも寄与しているのは間違いありま

せん。しかし、実際にはLEDチップ自体は非常に発熱量が多く、適切に放熱処理を行わないと器具本体が素手で触れないほどに熱くなってしまい、器具自体が短命化し不具合の原因となります。また、LEDだからといって永遠に使い続けられるわけではありません。適切な取扱い、より丁寧な利用が求められます。

展示空間でLED照明を検討される際、光の質、性能、器具デザイン、扱いやすさ、堅牢性、価格など様々な検討基準で採用を決定されているかと思いますが、まずは基本的なLEDの特性をあらためて理解し、その上で本当に求めるものが何なのか、また、LEDありきの照明設備入れ替えではなく、照明が作品や展示空間の視覚化にどのような効果や影響を与えるのか、今一度考えてみる必要があるとされている段階にきているように思えます。

当社では、各作品に対する光の質や当たり方だけでなく、作品を含む全ての展示空間全体が、その展覧会の意図や想い、そして来館される方々がストレスなく純粋に作品に向かい合うことができる、そんな空間づくりをするために寄与できることは何か、また可能な限り、不必要な要素を照明によって作り出さないことなどを常に念頭におき、館のみなさんと対話しながら限られた時間の中でも最大限理想にたどり着けるよう、丁寧に仕事をしようという心がけております。引き続きよろしくご願ひ申し上げます。

公益財団法人ポーラ美術振興財団 [公益財団法人]	
公益財団法人鹿島美術財団 [公益財団法人] 株式会社集英社 [出版業]	
エア・ウォーター防災株式会社 [製造業] カトーレック株式会社 [一般貨物自動車運送業] 共同通信社 [通信社] 光明理化学工業株式会社 [製造業] 株式会社高島屋 [小売業] 株式会社DNPアートコミュニケーションズ [サービス業] 株式会社伏見工芸 [展示装飾業] ヤマト運輸株式会社 [美術品輸送] 読売新聞東京本社 [新聞]	
株式会社グッドフェローズ [Webチケット販売、発券精算システム] 株式会社水声社 [出版] 公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団 [公益財団法人] 株式会社ユニークポジション [情報サービス業] 株式会社レンブラント [画商]	
アート印刷株式会社 [デザイン・印刷・出版業] 有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク [展覧会企画制作] 株式会社NHKエデュケーショナル [映像を中心とするコンテンツ制作] 株式会社加島美術 [美術商] 株式会社キュレイターズ [企画・デザイン・コンサルタント] 株式会社熊平製作所 [製造業 (収蔵庫設備・入退館ゲート)] 株式会社広済堂ネクスト [情報・印刷] 産経新聞社 [新聞、広告、出版] 公益財団法人西洋美術振興財団 [公益財団法人] 大日本印刷株式会社 [総合印刷業] 株式会社トップアート鎌倉 [額縁額装・画材] 株式会社パレット [文化財の保存修復用品 製造と販売] 美術商社 盛林株式会社 [現代アートギャラリーの運営] 有限会社丸栄堂 [美術商] ライトアンドリヒト株式会社 [照明器具販売] 早稲田システム開発株式会社 [ミュージアム向け IT サービス提供]	株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ [美術展企画等] エヌ・アンド・エー株式会社 [アートコンサルティング] 株式会社NHKプロモーション [展覧会等のイベントの企画・制作] 株式会社ギャラリーためなが [画商] 協同組合美術商交友会 [美術業界団体] 株式会社クレヴィス [展覧会企画・出版] 金剛株式会社 [製造業 (保管機器・銅製家具製造)] 進和テック株式会社 [ガス対策機器販売] 一般社団法人全国美術商連合会 [美術業界団体] 株式会社東京美術倶楽部 [貸会場業等] 中西出版株式会社 [図録・書籍の制作・出版] 株式会社美術出版社 [出版事業] 本州四国連絡高速道路株式会社 [運輸業] 株式会社メルコグループ [資産管理] 株式会社ロココ [情報通信業]
イカリ消毒株式会社 [サービス業] M&Iアート株式会社 [美術商] 東京新聞 [新聞業] 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 [印刷業] 一般社団法人日本写真著作権協会 [一般社団法人]	
株式会社丹青研究所 [サービス業 (コンサルタント)] 有限会社アート・フリース [グッズ制作・販売] 株式会社アートローグ [コンサルティング業] 影川 幸一 [アートプランナー] 株式会社Gakken [出版] 株式会社求龍堂 [出版・デザイン業] 株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」[出版社] 株式会社T T トレーディング[HOGOS] トライベクトル株式会社 [翻訳サービス業] 株式会社美術年鑑社「新美術新聞」[出版業]	

第4回定時社員総会等について

令和6(2024)年6月6日(木)、青森県弘前市において開催された第4回定時社員総会及び臨時社員総会並びに令和6年度第2回理事会及び臨時理事会についてご報告します。

社員総会に先立ち、同日の午前中、弘前文化センター「小ホール」において、令和6年度第2回理事会が開催され、第1回理事会開催(4月24日)後に入会申込のあった正会員、個人会員及び賛助会員への入会申込の審議と合わせて退会する個人会員及び賛助会員の報告並びに第5回定時社員総会の開催地及び担当館について審議が行われ、決議されました。また報告事項として定款第42条第2項に基づく会長からの職務執行状況の報告があり、閉会しました。

その後、13時から弘前文化センター「大ホール」において、弘前れんが倉庫美術館を主担当とし、青森県立美術館、国際芸術センター青森、十和田市現代美術館、八戸市美術館の青森県内の4館の協力により、第4回定時社員総会が行われました。

開催にあたり弘前市の櫻田宏市長から歓迎挨拶、文化庁の高井絢博物館振興室長から祝辞の後、弘前れんが倉庫美術館の木村絵理子館長の議長により、正会員館143館の出席(議決権行使212個)により、法人化後の対面による総会としては4回目となる社員総会が行われ、先ず令和5年度事業報告及び収支決算、令和6年度事業計画及び収支予算が決議され、令和6年度入会申込の正会員として、小樽芸術村、皇居三の丸尚蔵館、桑山美術館、板橋区立美術館、三鷹市美術館、国立アトリサーチセンターの6館、

事務局次長 生島達久(おじまつひさ)

個人会員9名が新たに承認されましたが、個人会員6名の退会があり、正会員が416館、個人会員50名となりました。

また、今年度は2年任期となる役員(理事・監事)の改選期となりますが、理事の河野元昭静嘉堂文庫美術館長、高階秀爾大原美術館長、菅野洋人郡山市立美術館長、水沢勉神奈川県立近代美術館長、酒井忠康世田谷美術館長、松本透長野県立美術館長、藤田直義高知県立美術館長、菅章大分市美術館長の8名の方が退任されるため、地域(ブロック)や会員館数などを考慮して、現行の25名から定数の上限である26名とし、新任予定の理事を平澤広萬鉄五郎記念美術館長、田中淳大川美術館長、貝塚健千葉県立美術館長、橋本善八世田谷美術館長、杉野秀樹砺波市美術館長、笠原美智子長野県立美術館長、三浦篤大原美術館長、安田篤生高知県立美術館長、後小路雅弘北九州市立美術館長の9名、監事を山内宏泰リアス・アーク美術館長並びに再任予定の理事17名及び監事1名の役員候補者について審議が行われ、新役員が選任され、閉会しました。

その後、新役員による臨時理事会の開催のための会場を午前中の理事会開催場所「小ホール」へ移し、理事会の決議により、富田章東京ステーションギャラリー館長が会長に選任されました。

副会長には、引き続き国立新美術館の逢坂恵理子館長、徳川美術館の徳川義崇館長、長崎県美術館の小坂智子館長の3名が富田会長から指名され、理事会で承認されました。各専門委員会についても改選期となり、企画委員長には、引き続き国立国際美術館の島敦彦館長が選出され、企

画委員及び各研究部会長は変更なく全員再任されました。広報委員長には、新たに大阪中之島美術館の菅谷富夫館長が選出され、委員長から広報委員会委員の推薦が行われ承認され、合わせて副委員長に鳥取県立美術館の尾崎信一郎館長が指名されました。また、災害対策委員長は宇都宮美術館の佐々木吉晴館長が再任され、委員長から災害対策委員会委員の推薦が行われ承認され、合わせて千葉県立美術館の貝塚健館長が副委員長に指名され、臨時理事会は、閉会となりました。

引き続き、社員総会の会場である「大ホール」において、臨時社員総会が行われ、会長、副会長、専門委員会委員長及び委員選定の報告、専門委員会及び研究部会の活動報告についての報告が行われ、閉会しました。

社員総会に続き同所において、特別行事として、木村絵理子弘前れんが倉庫美術館長の司会進行により、杉本康雄青森県立美術館長、服部浩之青森公立大学国際芸術センター青森館長、佐藤慎也八戸市美術館長、鷲田めるろ十和田市現代美術館長の登壇による「青森県内5つの美術館がアートフェスを開催するまで」が行われ、5館

の連携の理念や経緯、青森県という地域の美術館の取り組みや連携に対する展望などをお話いただきました。

また、特別行事後に弘前れんが倉庫美術館の視察があり、その後、情報交換会会場となるアートホテル弘前シティへの移動となりましたが、多くの方々の参加を得ることができました。

前回の青森での開催(平成19年)時には未だ開館していなかった弘前れんが倉庫美術館の視察は、翌日(総会2日目)の6月7日にも実施していただきました。

総会の準備と実施にご尽力をいただきました弘前れんが倉庫美術館をはじめご協力をいただきました青森県立美術館、国際芸術センター青森、十和田市現代美術館、八戸市美術館の皆様にあらためて御礼申し上げます。

最後になりますが、第5回定時社員総会は、大分県立美術館を担当館とし、来年6月初旬に大分県大分市で開催予定です。詳細が決まりましたら改めてホームページ等で告知や連絡させていただきますので、今年と同様に多くの会員館の皆様に参加により、年に一度の社員総会が有意義になるようよろしくお願いします。

専門委員会から

広報委員会から

広報委員会副委員長 尾崎信一郎(おさきしんいちろう・鳥取県立美術館)

ホームページと機関誌『ZENBI』を通して、全国美術館会議の広報を担当する広報委員会より最近の活動についていくつかの報告を書き留める。

まず長く広報委員会の委員長を務めていただいた富田章東京ステーションギャラリー館長がこのほど全国美術館会議の会長に就任されたことを受けて、新しい広報委員会委員長として大阪中之島美術館の菅谷富夫館長をお迎えすることと

なったことを報告する。副委員長は引き続き鳥取県立美術館の尾崎が務める。

委員会全体としては、総会の直前、5月28日に前委員長と広報委員4名、事務局1名によって活動の進捗と今後の予定について協議し、委員会全体の認識を共有した。

機関誌『ZENBI』については、予定どおり25号を今年2月1日に発行し、次号26号について

も、この原稿を書いている時点でブロック報告と全美フォーラムの記事がすべて入稿している。26号は全美フォーラムへの投稿が多く、これまでで最多の8編の原稿が寄せられている。個人会員、賛助会員にも投稿の門戸を広げた効果が如実に現われているといえよう。今後、新入正会員館紹介の記事などの入稿を待って校正作業のうえ、8月中に発行の予定である。賛助会員からの投稿も続いており、記事の幅が広がった印象がある。

ホームページに関しては必要に応じて、日々内容の更新を続けているが、3月13日に、コロナ以降初のハイブリッド形式での会合を開催し、ホームページ全体の確認と今後の課題について共有

した。これまで懸案となっていた災害対策ページのリニューアルについては、災害対策委員会の主導により、新たに内容を再構築し公開した。大変有益な内容なので、ぜひご覧いただきたい。また、トップページにバナーを設けていた「新型コロナウイルス対策関係のお知らせ」については、再構築された上記ページに格納した。

なお、委員長の交代と時期を同じくして広報委員の交代があり、今後は機関誌については2名、ホームページについても2名が担当することとなり、委員長を含めて5名の体制で委員会を構成することとなった。

災害対策委員会から

災害対策ページをリニューアルしました！

災害対策委員 田中善明 (たなか よしあき・サイトミュージアム)

この度、全国美術館会議ウェブサイトの災害対策ページを全面的にリニューアルしました。トップページのバナー「全国美術館会議と災害対策」をクリックするか、もしくは紺色のメニューバーの「組織と活動」のプルダウンメニューから「災害対策」を選んでいただくと、災害対策のトップページへと切り替わります。災害対策情報のすべてが、このページを起点にご覧いただけるようになりました。

主な改善点は以下の通りです。

- ①全国美術館会議の災害対策についての経緯をコンパクトにまとめ、ページの先頭に配置。
- ②災害対策委員会からのお知らせに特化した一覧を上部に配置。

- ③「災害に備える」「災害が発生したら」コーナーの新設。
- ④どのページにすすんでも迷子にならない、フッターメニューの新設と固定。
- ⑤「災害対策関連文献およびウェブサイト」コーナーの新設。

③の「災害に備える」のページは8項目のQ&Aからなっています。「自宅や出張中等、参集までの安全確保と動きがイメージできていますか?」「災害が発生したとき、どこに報告するかを知っていますか?」「備蓄しておいた方がよいものを検討していますか?」など、災害時の状況をさまざまにイメージしていただき、準備するうえで参考

になりそうな情報を答えの中に用意しました。

一方の「災害が発生したら」は、「1. 先ずは安全確保!」「2. 避難誘導」「3. 資料対応」「4. 救援が必要な場合は」「5. 二次災害の防止」の5項目にまとめ、各項目を選択すると、起こりうる事象やその対応方法(例)がご覧いただけます。

これらのページの内容は、阪神・淡路大震災や東日本大震災に際して刊行した総合調査報告書や文化財レスキュー事業記録集を土台に、他の文献や内閣府ウェブサイト、あるいは災害対策委員の経験などを加えたものとなっています。

④のフッターメニューの新設は、今回の最重要課題でした。ウェブサイト内で災害対策情報がさまざまな階層に分散していたため、探したい災害対策記録や情報がどの場所にあるのかわからない。どのファイルのことを現在議論しているのかわからないような事態も発生していたため、サイト内の新旧ファイルを整理するとともに、利用者が知りたい情報に素早くたどりつけるよう、この仕組みが採用されることになりました。

そして、このフッターメニューの左下に位置する「災害対策関連文献およびウェブサイト」(⑤)は、今回注目いただきたい内容のひとつです。防災マ

ニアルは自分たちで館の特性を把握し、作り上げ、更新していくのが基本ですが、地域防災計画や都道府県文化財保存活用大綱、あるいは他のネットワークなどの整合性がとれていることが前提で、意外と見落としが発生して後で苦勞します。ここには、災害対策に関する主な全国美術館会議刊行物のほか、各美術館が参考にできそうな文献やウェブサイトを厳選して掲載しています。

この災害対策ページの一番下に「※会員館に広く知ってもらいたい災害対策の見解があれば、ぜひ情報を事務局までお寄せください。」とありますように、同ページにはなお改善の余地があり、新たな災害と向き合いながら更新されていく性質のもので、実際にこのページを利用された感想や改善案など、どんなささやかなことでも結構ですのでお力添えをいただきますようお願いいたします。

最後に、「災害に備える」「災害が発生したら」のホームページ上での視覚効果や解説部分への遷移方法についてはCMSという構造上の制約の中で最善を尽くされた株式会社ユニークポジションの上坂真由氏に負うところが大きく、この場をお借りしてお礼申し上げます。



全美ウェブサイトのトップページ



「全国美術館会議と災害対策」トップページ



「災害に備える」Q & A のページ

『ZENBI』では、次の要領で広く
皆さんからの原稿をお待ちしています。

[原稿の内容]

- ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・原稿には表題を付してください。

[投稿の資格]

- ・全国美術館会議正会員の職員、個人会員、賛助会員の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・匿名の投稿は受けつけません。

[投稿に係る詳細]

- ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

[締切]

- ・第 27 号 (2025 年 2 月発行予定) については 10 月 31 日、
第 28 号 (2025 年 8 月発行予定) に関しては 4 月 30 日を締切とします。(当日必着)

[提出先]

s-osaki@pref.tottori.lg.jp (尾崎)
iked@kanazawa21.jp (池田)
aoyama_k@nmao.go.jp (青山)

[問い合わせ先]

内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒 682-0816 鳥取県倉吉市駄経寺町 212-5
倉吉未来中心 2 階 鳥取県立美術館 (美術館整備局)
(一社) 全国美術館会議広報委員 尾崎信一郎
s-osaki@pref.tottori.lg.jp TEL 0858-47-3011

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として下記に限る。
 - ア 全国美術館会議正会員が所属する館の職員
 - イ 全国美術館会議個人会員
 - ウ 全国美術館会議賛助会員の職員
- (2) 投稿原稿は他誌 (電子媒体を含む) に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿 (写真を含む) は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として 2,000 字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは (一社) 全国美術館会議広報委員会 (以下「広報委員会」という。) に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は広報委員会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は (一社) 全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典 (掲載誌名、巻号ページ、出版年) を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。

制定：平成 23 年 7 月 24 日
改正：令和 4 年 1 月 31 日
全国美術館会議広報委員会

賛助会員、 個人会員の皆さまへ

「全美フォーラム」について、正会員の職員以外にも個人会員、賛助会員からの投稿を広く募っています。多くの立場からの活発な投稿をお待ちしております。

同様に個人会員、賛助会員の皆さまへの特典強化の一環として、機関誌や全国美術館会議ホームページでの賛助会員のご紹介を充実させていく予定です。

また、ホームページは現在正会員以外には閲覧制限がなされていますが、個人会員、賛助会員の方に対しては制限を緩和すべく、当委員会で準備を進めているところです。

今後も一層のご支援、ご協力をお願いいたします。

広報委員会

編集後記

『ZENBI』の26号をお届けする。コロナ禍はひとまず終息し、美術館活動も平常を取り戻している。これほどの災厄が次々に訪れるとは考えたくないが、美術館の生命線を絶つかのごとき今回の事態から私たちが学ぶべきことは多い。なんらかのかたちでコロナ禍と美術館という問題は総括されるべきであろう。

今回は全美フォーラムに8編もの投稿をいただいた。個人会員からの投稿もあり、本誌は創刊以来、最大の頁数となった。編集部としては嬉しい悲鳴を上げているところである。

内容に関しても、美術館におけるジェンダーの問題や美術館とサステナビリティといった今日私たちが直面する課題が取り上げられており、美術館が時代とともに変わっていかなければならないという思いを強くした。引き続き多くの会員からの投稿を期待している。

6月の理事会と総会で会長の交代が決まった。建昌哲埼玉県立近代美術館館長には11年もの長きにわたって会長を務めていただき、一般社団法人化という全国美術館会議にとって積年の懸案に道筋をつけていただいた。長きにわたる御苦勞にあらためて深く感謝を申し上げたい。美術館をめぐる状況は厳しい。代わって会長に就いていただく富田章東京ステーションギャラリー館長にも引き続き多くの問題に対応していただくことになろう。本誌と広報委員会も微力ながらそのお手伝いをしたいと考えている。なお、富田会長は広報委員長でもあったため、広報委員会も菅谷富夫大阪中之島美術館館長を新しい広報委員長に迎えて再出発することとなる。引き続き会員のみなさまの御協力をお願いしたい。(O)

IPMを取り入れた保存環境づくりと 虫・カビの防除で文化財を守りましょう。



公益財団法人 文化財虫菌害研究所

〒160-0022 東京都新宿区新宿二丁目1番8号 新宿フロントビル6F

TEL 03 (3355) 8355 FAX 03 (3355) 8356 www.bunchuken.or.jp

全国美術館会議ホームページでは、
美術館運営に有益な情報が掲載されています。
ぜひご活用ください。



全国美術館会議
ホームページ

